

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	ZHUANG JIECHUN (しょう しょうじゅん)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第 1163 号
○授与年月日	2017 年 3 月 31 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	『とりかへばや物語』の研究
○審査委員	(主査) 中本 大 (立命館大学文学部教授) 中川 成美 (立命館大学文学部教授) 上野 隆三 (立命館大学文学部教授)

<論文の内容の要旨>

庄婕淳氏によって提出された全三章六節および付論で構成される本博士論文は、「女の物語」、「ジェンダーコード」、「日中比較文学」の三つの視点と方法論によって、平安時代後期成立の『とりかへばや物語』におけるジェンダーの言説について多角的に考察したものである。

第一章では、平安時代文学作品における女性のライフサイクル、特に結婚、妊娠、出産に関する言説に注目し、「女の物語」というジャンルにおける、『とりかへばや物語』の継承と展開を考察し、つづく第二章では、ジュディス・バトラーのジェンダー理論を援用し、ジェンダーが社会によって構築された一種のパフォーマンスである、とする認識のもと、「男性的」「女性的」という固定観念から脱却し、当時の歴史的・物語的文脈に基づき、テキストに表出しているジェンダーコードを読み直すことで、『とりかへばや物語』に至る当時の文学におけるジェンダーに関する言説の特色を解明した。

第三章では中国の異性装を題材とする文学作品を取り上げ、日中比較文学研究の視点から、女性の婚姻と家制度という作品に共通する視点を切り口として、「異性装」を構成する言説を分析することで、『とりかへばや物語』の新たな解読の可能性を探ることを目的とした。更に付論として、新編古典文学全集を底本とし、『とりかへばや物語』巻一前半の中国語訳を同綴している。これは中国語による作品全訳の端緒である。

以下、各章を詳細に説明する。

『とりかへばや物語』は、婚姻・妊娠・出産という女性の人生における重要なできごとをめぐって、女主人公をはじめとする女性の生を描いた作品である。特に女主人公が秘密

の妊娠と出産を経験することは重要で、『夜の寝覚』が、女主人公である中の君の突然の契りによる妊娠と秘密の出産を描いていることと密接な関係をもつのであるが、この展開について、先行研究を踏まえ、第一章では、平安文学における女性のライフサイクル、すなわち結婚、妊娠、出産に関する言説に注目し、「女の物語」というジャンルにおける、『とりかへばや物語』の継承と開拓を解明している。第一節では平安時代物語における妊娠の言語表現を検討し、『とりかへばや物語』の妊娠表現は先行物語である『源氏物語』や『夜の寝覚』から継承したものであることを明らかにした上で、異なる表現の使い分けが、物語展開に果たす役割を解明している。つづく第二節では、女主人公の婚姻・妊娠・出産に関する言説を、同時代成立の『今昔物語集』などとも比較し、家父長制社会の規矩に束縛されつつも、なお主体的に生きようとする女主人公の人物像を明らかにしている。これは『とりかへばや物語』が拓いた新たな表現の可能性として評価できるものであることを称揚している。

『とりかへばや物語』において「異性装」はいかなる意味を持つのであろうか。先行研究において、きょうだいたちそれぞれのジェンダーは、現代的な感覚から自明的なものと捉えられている。ジェンダーの視点から作品を検討する先行研究の多くも、きょうだいを一対のものとして扱い、その交換可能の論理を論の中心とするものであった。第二章では、それらとは方向性を換え、ジュディス・バトラーのジェンダー理論を援用し、ジェンダーが社会によって構築された一種のパフォーマンスであるという認識のもと、当時の歴史的な文脈に基づき、テキストに集約されているジェンダーコードの表出を捉え直すことで、『とりかへばや物語』に至る当時の文学史におけるジェンダーに関する言説の特色を解明することを目的としている。

第二章の第一節では、女主人公の「走る」という身体動作と、才学に関する描写を分析する。女主人公の異性装の要因となる「走る」という動作は、『源氏物語』や『虫めづる姫君』などを踏まえるものの、それを「男性的ジェンダー」として定着させたのは『とりかへばや物語』であると考えられること、また、『とりかへばや物語』以前、才学のある女性は物語の主人公として登場することはないものの、『とりかへばや物語』が才学を思う存分発揮する女主人公を造形した影響を受けて、後の物語である『在明の別れ』・『我が身にたどる姫君』などにはそのような女主人公像が踏襲されることを明らかにしている。

第二節では、「交じらふ」という語彙をめぐる女主人公、父左大臣、宰相中将という三人の心情に注目し、『紫式部日記』との比較検討を中心として『とりかへばや物語』の表現の特質を解明している。父左大臣は、きょうだいたちの境遇の異常さを認識しながらも、時勢に合わせて、きょうだいたちの「交じらふ」ことを決することで、物語を大きく展開する役割を果たしていることを明らかにした上で、女主人公は、身分の露見を恐れるためだけでなく、「ひたおもて」なることに対する複雑な思いを抱えていること、女主人公は、世人との認識とはずれがあるものの、自分の理解している「世の常」を踏まえ、男主人公の成功を願っていること、また、宰相中将との「世の常」に対する認識のずれが、二人の関

係を破綻させることを明らかにしている。

「異性装」を題材とする文学的比較研究は多くない。『とりかへばや物語』を取り上げた研究は、鈴木弘道「とりかへばや物語と外国文学」と小田桐弘子「男装女装物語比較考」との二篇のみである。それらの考証を踏まえ、第三章では中国の異性装を題材とする文学作品を取り上げ、日中比較文学の視点から、女性の婚姻と家制度という共通する課題を切り口として、「異性装」を構成する言説を分析することにより、『とりかへばや物語』の新たな解読の可能性を探ることを目的としている。

第三章の第一節は、文献として中国現存最古の異性装のモチーフを扱う戯曲である明代の徐渭（一五二一～一五九三）編『四聲猿』所収「雌木蘭替父從軍」及び「女状元辞凰得鳳」の二作品を比較の対象として取り上げる。異性装にもかかわらず、「結婚」を通して、夫の「家」へ帰属することは女主人公に科せられた共通の結末であった。また、女性の「結婚」に必要とされる貞操の強調は、異性装の女主人公共通の束縛であること、才能を發揮し、周囲の支持を得て異性装に挑む中国の女主人公である花木蘭と黄春桃と比較して、『とりかへばや物語』の女主人公は、異性装によってその才能を思う存分發揮して、世人に評価されるものの、「人に違ひける」身で常に暗澹たる思いを抱いているという明確な相違があることを丁寧に指摘している。

第二節では、明代末期の弾詞小説『玉釧縁』を比較対象として取り上げる。きょうだいの異性装と身分の交換というテーマを共有しながら、『玉釧縁』の兄妹の異性装は服装というコードを変えることで自由に行き来できるのに対して、『とりかへばや物語』のきょうだいの異性装は自在ではなく、女主人公の心の問題の顕在化と不可分であること、また『とりかへばや物語』の異性装の核心をなすのは、男性的あるいは女性的ジェンダーをいかに演じるかではなく、異性装の決意をしてから、いかにしてそのジェンダーを身に付けたかという異なるプロセスであることを論証していく。さらに『とりかへばや物語』と『玉釧縁』は、「女の物語」として、女性の声無き反抗を描くことで、男性社会が定義する理想的恋人像の破綻を暴く点が共通していることなどを検証している。

平安物語文学の頂点である『源氏物語』は、豊子愷と林文月などの著名な翻訳を含む十数種類の中国語訳が存在しているに比べて、『とりかへばや物語』は中国ではほとんど紹介されていない。一九二九年に出版された謝六逸によって編纂された『日本文学史』に、わずか数行の紹介があるだけである。付論として、新編古典文学全集（底本は国文学研究資料館初雁文庫蔵本）冒頭部分の現代語訳を掲出している。中国語による全訳の端緒である。以上、複眼的な視点で、同時代の文学作品および中国の異性装物語と合わせて検証することで、「女の物語」である『とりかへばや物語』が、異性装というモチーフを生かしきることによって拓いた豊かな表現の世界を解明することを目的とした論考であった。

<論文審査の結果の要旨>

本博士論文は『とりかへばや物語』の作品研究として優れた成果であると考えられる。最

新のジェンダー理論を踏まえ、果敢に平安時代物語文学研究の方法論を開拓しようとする意欲は持ちつつも、決してそれを声高に主張しすぎることなく、作品の本文読解そのものにすべてを語らせようとする実証的な研究態度は、だれもが賛同せざるを得ない結論を導くものとして高く評価できるものである。以下、具体的に審査結果を述べる。

第一章第一節、平安時代文学作品が作中人物の妊娠をどのように描いてきたのか、というテーマ設定そのものも興味深いものの、その結論も実に注目されるものであった。『源氏物語』と『栄花物語』の明確な相違、『とりかへばや物語』を考察する上での『源氏物語』と『夜の寝覚』の重要性の提起など、庄氏の主張には異論を差し挟む余地はなく、首肯すべきものと考えられる。ここでの考察では、女一宮に注目し、その分析に筆を割いているのも卓見であり、女主人公の悲哀を映し出す合わせ鏡のようなその役割が、丁寧に分析されている。第二節は本論文の白眉であり、庄氏の方法論の確かさを示す緒論としての役割を果たしていると考えられる。『今昔物語集』巻第二十七第十五話との比較は非常に有用で興味深く、平安時代後期物語作品と説話文学との相互の影響関係を考察する端緒としても意義があると考えられる。本節を通して「父左大臣＝女主人を束縛する「家」」の図式が浮かび上がらせる展開も見事であった。

第二章第一節は雑誌論文として発表されたときから注目されていた論文に新たな視点を付加して深化させたものである。女主人公の才学をめぐっての『大鏡』、特に藤原道隆北の方・高階貴子や道隆三女との比較検討は興味深く、両作品の前後関係の解明にもつながる重要な指摘をも含んでいることは重要である。第二節では「交じらふ」「ひたおもて」「世の常」という相互にかかわりあって作品中に鏤められている三つのキーワードの検証から、宰相中将と女主人公との関係性の破綻を考察する、という視点そのものが興味深く、筆者の着眼点のユニークさと作品分析における優れた力量が看取できる好論であった。

第三章は、あくまでも『とりかへばや物語』という作品を考察するための契機としての比較対象作品の選定であるため、典拠論に収斂する一般的な和漢比較文学研究の方法論とは距離を置くものの、仏教的理解に基づく因果応報譚としても位置付けられる『とりかへばや物語』の独自性を解明する考察として評価し得ると考えられる。

このように、全体として高く評価すべき論考ではあるものの、いくつかの課題も指摘される。第一に日本古典文学研究、特に平安時代女流物語文学研究におけるジェンダー理論を援用した先行研究については、更に丁寧な指摘と分析が必要であったこと、『とりかへばや物語』が女性の生理について踏み込んだ表現を持つことは一読して自明ではあるものの、その特異性についても、筆者には自明のものであったとしても、論文中でも丁寧に触れておく必要があったことは、こうした表現が中国文学史上看取できない本邦独自なものであり、すでに中国語での出版を予定している筆者にとっても有用であると考えられる。また、第三章の作品選定基準の更なる明確化や、中国における女流弾詞作品研究の最新成果については、更に丁寧な言及が必要である旨の指摘もなされた。

なお、付論の翻訳については、筆者自身の丁寧な現代日本語訳を経た上での中国語訳で

あること、「貝覆ひ」などの遊戯や有職故実、官職名など専門用語の表記をどのように翻訳するか、詳細な注釈をどの程度付すべきかなどの課題はあるものの、作品の価値を広く世界に紹介するためにも重要な成果であることが確認された。

以上、更に改善を求める部分はあるものの、翻訳に示されているように、日本古典文法にも精通した気鋭の日本古典文学研究者による、すぐれた作品研究であることは疑いようがなく、審査委員会は一致して、本論文は博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公聴会は2017年1月13日（金曜日）13時から15時まで、末川記念会館第2会議室で行われた。

審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表などの様々な研究活動、特に数多くの国際学会や国際シンポジウムでの研究発表、英語文献を駆使して研究を進める言語運用能力、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

以上、論文審査、公聴会での結果を踏まえ、本論文が博士の学位に値することについて意見は一致した。審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。